

白山信仰（はくさんしんこう）について

平成26年8月22日

岩井國臣

はじめに

天皇は祈る人である。私たちも天皇に習って国民の幸せを祈らなければならない。自分の幸せ、親や子供の幸せ、友達の幸せ、地域の人々の幸せ、みんなのせ、世界の平和を祈らなければならない。そういう生活を送りたいものだ。私たちは、「祈りの国民」なのである。「祈り」については、私の電子書籍に「祈りの科学シリーズ（１～８）」があるのでそれを参照してほしい。

http://honto.jp/ebook/pd_25231954.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231955.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231956.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231957.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231958.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231959.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231960.html

http://honto.jp/ebook/pd_25231961.html

名医にかかれば、関係のない薬でも、患者は治る。こういうのをブラシーボ効果という。医学的に認められた事実である。

村上和雄の著書「人は何のために＜祈る＞のか」（２０１０年１２月、詳伝社）によれば、「祈り」についても同様のことがあり、それは医学的事実として認められる。しかし、医学的事実として、ブラシーボ効果では説明のつかないことがあるという。上記著書から、その部分を紹介しておく。すなわち、

『最近、アメリカの病院で、大変興味ある実験が行われました。新病患者３９３人による実験で、他人に祈られた患者はそうでない患者よりも人工呼吸器、抗生物質、透析の使用率が少ないということがわかりました。しかも、西海岸にあるこの病院に近いグループからの祈りも、遠く離れた東海岸側からの祈りも、同様に効果がありました。そして、これらの患者は祈られていることすら知らなかったのです。距離を超えて、他の人のために祈ることが有効だとすると、この祈りは単なるブラシーボ効果では説明が付きません。』・・・と。

「１００匹の猿現象」と同じ現象が「祈り」の場合にも起るのである。再度申し上げる。天皇は祈る人である。私たちも天皇に習って国民の幸せを祈らなければならない。自分の幸せ、親や子供の幸せ、友達の幸せ、地域の人々の幸せ、みんなのせ、世界の平和を祈らなければならない。そういう生活を送りたいものだ。私たちは、「祈りの国民」なのである。ところで、私たちの「祈り」の原点、信仰の原点に縄文時代の「シラ信仰」がある。その「シラ信仰」について十分な認識を持つておくことはきわめて重要なことであり、私は、この小論文で「シラ信仰」について相当突っ込んだ考察を試みた。私のその考察は、前田速夫の名著「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（２００６年６月、河出書

房新社)を下敷きにしたものである。白山信仰を勉強していくと、実に謎だらけなのである。前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」を読んでも、謎が謎を呼ぶといった具合に白山信仰は実に奥が深い。

白山信仰(はくさんしんこう)は、加賀国、越前国、美濃国(現石川県、岐阜県)にまたがる白山に関わる山岳信仰である。その中心は、現在、越前馬場・平泉寺白山神社と加賀馬場・白山比咩神社と美濃馬場・長滝白山神社となっている。

山岳信仰は、自然崇拜の一種で、狩猟民族などの山岳と関係の深い民族、中国やわが国の民族がそうであるが、そういう民族が山岳地とそれに付帯する自然環境に対して抱く畏敬の念、雄大さや厳しい自然環境に圧倒され恐れ敬う感情などから発展した宗教形態である。山岳信仰では、山に靈的な力があると信じられ、自らの生活を律するために山の持つ圧倒感を利用する形態が見出される。

「山の靈力」については、私の論文「山地拠点都市構想」(後編)の第3章「山の靈魂について」の第2節に町田宗鳳の「山の靈魂」を紹介しているので、それをご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/san03.pdf>

日本の古神道においても、水源・狩猟の場・鉾山・森林などから得られる恵み、雄大な容姿や火山などに対する畏怖・畏敬の念から、山や森を抱く山は、神奈備(かんなび)という神が鎮座する山とされ、神や御霊が宿る、あるいは降臨する(神降ろし)場所と信じられ、時として磐座(いわくら)・磐境(いわさか)という常世(とこよ・神の国や神域)と現世(うつしよ)の端境として、祭祀が行われてきた。

古くから「越のしらやま」として、詩歌に詠われた白山は、富士、箱根とならび「日本三名山」のひとつに数えられる秀麗な峰であった。また、白山から流れ出る豊富な水は四方の川を満たし、それが広く田畑を潤すお蔭で、人々の生活と農事の一切が成り立っていた。このため、古代より白山は「命をつなぐ親神様」として、水神や農業神として、山そのものを神体とする原始的な山岳信仰の対象となり、白山を水源とする九頭竜川、手取川、長良川流域を中心に崇められていた。

奈良時代になると修験者が信仰対象の山岳を修験の靈山として日本各地で開山するようになり、白山においても、泰澄が登頂して開山が行われ、原始的だった白山信仰は修験道として体系化されて、今日一般に認識されている「白山信仰」が成立することとなった。富士山・立山・白山などの靈山に登って修行することなども禪定という。奈良時代より、高い山や、美しい山は靈山として山岳信仰の対象とされ、山地に於いて修行する者も現れ、それらは後に修験道へと発展していった。その禪定において禪定道(ぜんじょうどう)というのがある。禪定道とは、**禪頂**(山頂)に登るまでの山道を言う。禪定道の起

点は修行の起点でもあり、起点またはその場所を「馬場（ばんば）」と呼ぶ。例として、白山信仰での越前馬場、加賀馬場、美濃馬場などがある。

白山信仰については、四つの段階があった。第1段階は磐座（いわくら）・磐境（いわさか）に対して祭祀を行った縄文時代の信仰、第2段階はシラ信仰、第3段階は菊理媛（くくりひめ）信仰、第4段階は現在の白山（はくさん）信仰の段階である。磐座（いわくら）・磐境（いわさか）に対して祭祀を行った縄文時代の信仰とシラ信仰は、どこが中心という訳のものでなく、全国的に行われた信仰である。一方、菊理媛（くくりひめ）信仰と白山（はくさん）信仰は白山を中心に行われている信仰であり、例えば、他の地域でも菊理媛（くくりひめ）が祀られている祠や神社があるが、その祭神は白山の菊理媛（くくりひめ）である。

「シラ信仰」は全国的な信仰であり、その典型的な例として、① 沖縄や伊豆諸島に伝わる「シラの神」、② 奥三河の花祭り、③ 立山芦峯寺の布橋灌頂、④ 遠山郷の霜月祭りなどがある。これらについては、この小論文の補筆としてそれぞれホームページを作った。それぞれ私の力作であるので、是非、じっくりご覧いただきたい。

白山信仰（はくさんしんこう）について

白山信仰（はくさんしんこう）は、加賀国、越前国、美濃国（現石川県、岐阜県）にまたがる白山に関わる山岳信仰である。その中心は、現在、越前馬場・平泉寺白山神社と加賀馬場・白山比咩神社と美濃馬場・長滝白山神社となっている。

白山という山については、是非、次のホームページをじっくりご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hakusanto.pdf>

山岳信仰は、自然崇拜の一種で、狩猟民族などの山岳と関係の深い民族、中国やわが国の民族がそうであるが、そういう民族が山岳地とそれに付帯する自然環境に対して抱く畏敬の念、雄大さや厳しい自然環境に圧倒され恐れ敬う感情などから発展した宗教形態である。山岳信仰では、山に霊的な力があると信じられ、自らの生活を律するために山の持つ圧倒感を利用する形態が見出される。

「山の霊力」については、私の論文「山地拠点都市構想」（後編）の第3章「山の霊魂について」の第2節に町田宗鳳の「山の霊魂」を紹介しているので、それをご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/san03.pdf>

日本の古神道においても、水源・狩猟の場・鉱山・森林などから得られる恵み、雄大な容姿や火山などに対する畏怖・畏敬の念から、山や森を抱く山は、神奈備（かんなび）という神が鎮座する山とされ、神や御霊が宿る、あるいは降臨する（神降ろし）場所と信じられ、時として磐座（いわくら）・磐境（いわさか）という常世（とこよ・神の国や神域）と現世（うつしよ）の端境として、祭祀が行われてきた。また、死者の魂（祖霊）が山に帰る「山上他界」という考えもある。

また仏教でも、世界の中心には須弥山（しゅみせん）という高い山がそびえていると考えられ、空海が高野山を、最澄が比叡山を開くなど、山への畏敬の念は、より一層深まっていった。平地にあっても仏教寺院が「〇〇山△△寺」と号するのはそのような理由からである。

その後、密教、道教の流れをくんだ修験者や山伏たちが、俗世との関わりを絶ち、悟りを開くために山深くに入り修行を行った。これは、後に修験道や呪術的宗教などを生み出している。

古くから「越のしらやま」として、詩歌に詠われた白山は、富士、立山とならび「日本三名山」のひとつに数えられる秀麗な峰であった。また、白山から流れ出る豊富な水は四方の川を満たし、それが広く田畑を潤すお蔭で、人々の生活と農事の一切が成り立っていた。このため、古代より白山は「命をつなぐ親神様」として、水神や農業神として、山そのものを神体とする原始的な山岳信仰の対象となり、白山を水源とする九頭竜川、手取川、長良川流域を中心に崇められていた。

奈良時代になると修験者が信仰対象の山岳を修験の霊山として日本各地で開山するようになり、白山においても、泰澄が登頂して開山が行われ、原始的だった白山信仰は修験道として体系化されて、今日一般に認識されている「白山信仰」が成立することとなった。

泰澄は、越前国麻生津（福井市南部）にて、豪族三神安角（みかみのやすずみ）の次男として生まれる。14歳の時出家し、法澄と名乗る。越智山にのぼり、十一面観音を念じて修行を積んだ。大宝2年（702年）文武天皇から鎮護国家の法師に任じられ、その後養老元年（717年）越前国の白山にのぼり妙理大菩薩を感得した[1]。養老3年からは越前国を離れ、各地にて仏教の布教活動を行う。養老6年元正天皇の病氣平癒を祈願し、その功により神融禪師（じんゆうぜんじ）の号を賜った。天平9年（737年）に流行した疱瘡を収束させた功により、孝謙仙洞重祚により称徳天皇に即位の折り、正一位大僧正位を賜り泰澄に改名したと伝えられる。

これら泰澄の伝記は『泰澄和尚伝記』によるものであるが、実は、通常信じられているこれらの伝承は嘘っぱちであるらしい。

下出積与（しもでせきよ）という人の力作「白山の歴史・・・神と人とその時代」（1999年5月、北国新聞社）がある。下出積与は、歴史学者、研究分野は宗教史である。石川県出身。大聖寺中学校卒、東京帝国大学卒。金沢大学法文学部助教授、文学部教授、1968年明治大学教授。75年「日本古代の神祇と道教」で東大文学博士。「白山の歴史・・・神と人とその時代」という本は、白山信仰の真実に迫った本で、白山信仰を語るにはこの本を抜きに語るわけにはいかないと思う。

その本には、『泰澄和尚伝記』について次のような述べられている。すなわち、

『平安末期から明治の神仏分離に至るまで、白山修験の主導権をめぐる白山寺、平泉寺、長滝寺の本家争いの根拠になったのは、周知のように泰澄の権威である。しかし、その権威の伝承を記す『泰澄和尚伝記』は在地三寺のいずれにおいてもでも創作されたのではなく、菅原道真のライバル三善清行の長男で大修験者として著名な浄蔵につながる者が、在地の諸伝承を、貴族仏教の学僧による本地垂迹説の理論にもとづいて編成し直し、平安中期に中央において成立したものである。』

『 泰澄はいうまでもなく、奈良仏教の主流である官府的仏教とは全く関わりのない無縁のそうであった。民間仏教の世界に生まれ、そこを唯一の活動の場とし、生涯を在野の一民間宗教者として終えた。』・・・と。

浄蔵については、白山信仰（はくさんしんこう）というこの論考を進める上で再整理した「浄蔵と秦一族、そして円仁」というページの冒頭に紹介してあるので、それを参考にご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hatahieie.pdf>

比叡山延暦寺と並んで王城鎮護（都を守る）の山とされている愛宕神社は、大宝年間（701-704年）に、修験道の祖とされる役小角と白山の開祖として知られる泰澄によって朝日峰に神廟が建立されたのが創建とされているが、私が見るところ、どうもこれにも浄蔵の思惑が働いているようだ。愛宕神社は、平安遷都のおり、和氣清麻呂の強い意志によって創建されたが、和氣清麻呂の裏には浄蔵と秦一族の大きな支えがあったのであり、愛宕神社の創建に浄蔵や秦一族の思惑が働いたとしても不思議ではない。

平安初期において、すでに、白山の山岳信仰に大きな力を発揮していた民間宗教家・泰澄の権威を、浄蔵は比叡山天台宗の権威付けのために利用したのであり、秦一族は一族の繁栄のために利用したのであろう。白山において白山寺、平泉寺、長滝寺はいずれも比叡山延暦寺の末寺になっているし、美濃の長滝寺は秦一族との繋がりが濃厚である。美濃の長滝寺を美濃馬場というのだが、「馬場」とは何か？ その説明をしよう。

富士山・立山・白山などの霊山に登って修行することなども禪定という。奈良時代より、高い山や、美しい山は霊山として山岳信仰の対象とされ、山地に於いて修行する者も現れ、それらは後に修験道へと発展していった。その禪定において禪定道（ぜんじょうどう）というのがある。禪定道とは、禪頂（山頂）に登るまでの山道を言う。禪定道の起点は修行の起点でもあり、起点またはその場所を「馬場（ばんば）」と呼ぶ。例として、白山信仰での越前馬場、加賀馬場、美濃馬場などがある。その内、美濃馬場・長滝寺は秦一族との繋がりが濃厚なのである。その点については、以下において述べるとして。その前に、白山三馬場について説明しておきたい。是非、次のホームページをじっくりご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sanbaba.pdf>

それでは、美濃馬場・長滝寺について、「秦一族との繋がり」という観点に立って、持論をお話ししたい。

まず、美濃馬場・長滝寺の歴史的文化財について、次のホームページをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/nagatabun.pdf>

何故、美濃馬場・長滝寺にこのような数多くの歴史的文化財があるのか？ 全く驚きではないか。

[白山信仰（はくさんしんこう）](#)というこの論考を進める上で再整理した「[浄蔵と秦一族、そして円仁](#)」という上述のページで述べたように、浄蔵と秦一族、そして慈覚大師・円仁は、それぞれ深く繋がっている。白山において白山寺、平泉寺、長滝寺はいずれも比叡山延暦寺の末寺になっているが、それは、上述したように、白山の山岳信仰に大きな力を発揮していた民間宗教家・秦澄の権威を、浄蔵は比叡山天台宗の権威付けのために利用したのであり、以来、比叡山天台宗は、白山にその勢力を及ぼすように力を注いだ、その結果であろう。

秦一族が白鳥地方にいつやってきたかは判らないが、比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った頃には、すでに、白鳥地方に住みついて養蚕を行っていたらしい。

現在、美濃馬場・長滝白山神社では、毎年1月6日に「花奪祭（はなばいまつり）」という神事が行われている。1月6日に行われるところから、「六日祭」ともいう。

「花奪祭（はなばいまつり）」について、白洲正子は、次のように言っている。すなわち、

『この拝殿に高くつくった花笠を奪い合う行事で、荒っぽいのは山伏の伝統であろうが、その花を持って帰ると、蚕が良く育つという信仰があり、祭の時は日本全国から織物関係の人たちが集まってくるという。「花奪祭（はなばいまつり）」は古代の花祭り、稲の花をかたどって、豊作を祈る行事に、養蚕が加わっていったのであろう。白山の信仰には、いろいろなものがくっついてわからなくなっているが、はじめの神様を菊理媛（くくりひめ）といい、蚕と織物の守り神だったのである。』・・・と。

さすが白洲正子は歴史的直観力が働くと思う。今ここでの文脈から言えば、白洲正子のこの見解で、「花奪祭（はなばいまつり）」は養蚕関係の祭りであるという点だ。養蚕と言

えば、古代に、秦一族が全国に広めたもので、美濃馬場・長滝白山神社の「花奪祭（はなばいまつり）」は秦一族による祭りでもあったのである。

比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った時に、白鳥地方で養蚕を中心に勢力を張っていた秦一族が比叡山天台宗への助力を惜しまなかったのはいうまでもない。その時に美濃馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたものと思われる。美濃馬場・長滝寺にこ数多くの歴史的文化財があるのはそのためであろう。

猿楽を現在の能に完成させた世阿弥は秦一族だと言われているが、金春禅竹（こんぼるぜんちく）は猿楽の創始について明宿集のなかで、「日本における猿楽の創始者は聖徳太子に仕えた秦河勝だったとし、河勝の末子が猿楽のを引き継ぎ、それが今日の金春流に連なっている」と書いている。猿楽における本家・本流は、秦一族の金春流にあるわけだ。さらに言えば、大和猿楽の後援集団の長谷川党もまた秦一族である。秦一族が美濃馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたのは間違いないだろう。

なお、白山信仰の中心は、現在、越前馬場・平泉寺白山神社と加賀馬場・白山比咩神社と美濃馬場・長滝白山神社となっているが、このうち、菊理媛（くくりひめ）が祭神になっているのは美濃馬場・長滝白山神社だけである。加賀馬場・白山比咩神社の祭神は、比咩（ひめ）大神であり、神社側は菊理媛（くくりひめ）と同一視しているが、これには大いに疑問がある。私の考えでは、白山比咩神社が創建される以前からこの地方で信仰されていた地元の産土神が菊理媛（くくりひめ）であって、この神は、玄松子によると、玄松子が参拝した神社だけでも、数多い。それらの神社では、必ずしも菊理媛（くくりひめ）を比咩（ひめ）大神と同一視してはいない。ということは、もともと古くから地元で信仰されていた産土神が菊理媛（くくりひめ）であって、後年、白山比咩神社が創建されて、その主祭神が比咩（ひめ）大神となったものであろう。このように考えると、越前馬場・平泉寺白山神社と加賀馬場・白山比咩神社と美濃馬場・長滝白山神社という三馬場のうち、美濃馬場・長滝白山神社だけがもっとも古い信仰形態を残しているのではないかと思う。

したがって、私としては、その文化財の多さのみならず、もともと古くから地元で信仰されていた産土神が菊理媛（くくりひめ）を主祭神にしているという観点から、三馬場のうち、美濃馬場・長滝白山神社を白山信仰の代表的神社として、高い評価を与えたい。

なお、念のために申し上げておけば、菊理媛（くくりひめ）は日本書紀に初めて出て来る神の名であり、白山のみならず全国的にそれ以前の信仰があったのである。それが「シラ信仰」である。

白山信仰については、四つの段階があった。第1段階は磐座（いわくら）・磐境（いわさか）に対して祭祀を行った縄文時代の信仰、第2段階はシラ信仰、第3段階は菊理媛（くくりひめ）信仰、第4段階は現在の白山（はくさん）信仰の段階である。磐座（いわくら）・磐境（いわさか）に対して祭祀を行った縄文時代の信仰とシラ信仰は、どこが中心という訳のものでなく、全国的に行われた信仰である。一方、菊理媛（くくりひめ）信仰と白山（はくさん）信仰は白山を中心に行われている信仰であり、例えば、他の地域でも菊理媛（くくりひめ）が祀られている祠や神社があるが、その祭神は白山の菊理媛（くくりひめ）である。

「シラ信仰」は全国的な信仰であり、その典型的な例として、① 沖縄や伊豆諸島に伝わる「シラの神」、② 奥三河の花祭り、③ 立山芦峯寺の布橋灌頂、④ 遠山郷の霜月祭りなどがある。これらについては、それぞれホームページを作ったので、それを次ぎに紹介しておきたい。私の力作であるので、是非、じっくりご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/okiizusira.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/okumikawa.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/asikurajino.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/simotukima.pdf>

「シラ信仰」が全国的な信仰だとすれば、白山地方にそれが残っていても不思議ではない。私は、美濃馬場・長滝白山神社の「花奪祭（はなばいまつり）」がそうであると考えている。

では、美濃馬場・長滝白山神社の「花奪祭（はなばいまつり）」の様子を次のYouTubeでご覧いただきたい。

<https://www.youtube.com/watch?v=MP9CuH5hXzA>

神社の拝殿の前に、白蓋（びゃっかい）を飾った聖なる「奥の空間」（シラ空間）が作られ、花祭りの神事が行われるのである。その点、遠山郷の霜月祭りと同じである。シラ祭りなのである。上述したように、白洲正子も、「花奪祭（はなばいまつり）は古代の花祭り、稲の花をかたどって、豊作を祈る行事」だと言っているが、まさにこれは稲の豊作を祈る花祭りである。美濃馬場・長滝白山神社にもシラ信仰の形態が今なお残っている。

私はそう思うのである。

全国の白山神社には、白山（はくさん）神社と白山（しらやま）神社の2系統がある。白山（しらやま）神社は、古代のシラ信仰と繋がっている。

さて、前田速夫は、その著「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房新社）で、「ハクサン神社と音読する場合は一般の村落が祀る神社を指し、シラヤマ神社と訓読する場合は、バンダ（番太）＝長吏、つまり被差別部落が祀る神社を指すという区別がある」というネフスキーの説を紹介した上で、次のように述べている。すなわち、

『 白山信仰は白の神秘を宿している。夏期を除いて一年中雪をいただくその優美な山容はいうまでもないとして、問題は白山の主神である。本地仏が十一面観音というのも特異だが、白山比咩（しらやまひめ）は当初イザナミだったのに、いつの頃からか菊理媛（くくりひめ）に変わった。それは一体何故なのか。また、海人族が祀った磯良神（いそらがみ）やイタコが遊ばせるオシラ神、あるいは傀儡（くぐつ）の徒が祀る百神や人形の百太夫は白山神の同類とされ、白（しら）太夫および白（しら）び比丘尼は、白山信仰の宣布者であろうと推察されるが、それらにはいずれも白あるいはシラという言葉、観念がついてまわっていて、今ひとつ実態が定かでない。』

『 そして、さらに大きな謎は、東国の被差別部落の多くが白山神を鎮守に祀っていることだ。そもそも私が白山信仰に関心を持ったのは、初めて菊池山哉の本を読んで、そのことを教えられたからなのだが、この一事に限ってさえ、その理由を探ろうとすると、謎は謎を呼んで、伝播や歴史を考察するだけでは足りなくなった。』

『 山哉の見解がどういうものであったかは、前著「余多歩き、菊池山哉の人と学問」（晶文社）に詳述したので、そちらを参照していただきたいが、その核心を一言で言えば、白山神の前身であるシラヤマ神こそ日本列島の原住民が祀った神であるとのことだった。それは仮説的な問題提起として、おそろしく目覚ましいものだ。けれど、それで被差別部落に白山神が祀られたわけが氷解したわけではない。』・・・と。

そこで、私は、私の歴史的な知見を総動員して、「被差別部落とシラ信仰について」という小論文を書いた。以下にそれをご紹介しますので、是非、じっくり読んでいただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hisasira.pdf>

おわりに

浄蔵については、白山信仰（はくさんしんこう）というこの論考を進める上で再整理した「浄蔵と秦一族、そして円仁」というページの冒頭に紹介してあるので、それを参考にご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hatahieiei.pdf>

比叡山延暦寺と並んで王城鎮護（都を守る）の山とされている愛宕神社は、大宝年間（701-704年）に、修験道の祖とされる役小角と白山の開祖として知られる泰澄によって朝日峰に神廟が建立されたのが創建とされているが、私が見るところ、どうもこれにも浄蔵の思惑が働いているようだ。愛宕神社は、平安遷都のおり、和氣清麻呂の強い意志によって創建されたが、和氣清麻呂の裏には浄蔵と秦一族の大きな支えがあったのであり、愛宕神社の創建に浄蔵や秦一族の思惑が働いたとしても不思議ではない。

平安初期において、すでに、白山の山岳信仰に大きな力を発揮していた民間宗教家・泰澄の権威を、浄蔵は比叡山天台宗の権威付けのために利用したのであり、秦一族は一族の繁栄のために利用したのであろう。白山において白山寺、平泉寺、長滝寺はいずれも比叡山延暦寺の末寺になっているし、美濃の長滝寺は秦一族との繋がりが濃厚である

秦一族が白鳥地方にいつやってきたかは判らないが、比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った頃には、すでに、白鳥地方に住みついて養蚕を行っていたらしい。

現在、美濃馬場・長滝白山神社では、毎年1月6日に「花奪祭（はなばいまつり）」という神事が行われている。1月6日に行われるところから、「六日祭」ともいう。

「花奪祭（はなばいまつり）」について、白洲正子は、次のように言っている。すなわち、

『 この拝殿に高くつくった花笠を奪い合う行事で、荒っぽいのは山伏の伝統であろうが、その花を持って帰ると、蚕が良く育つという信仰があり、祭の時は日本全国から織物関係の人たちが集まってくるという。「花奪祭（はなばいまつり）」は古代の花祭り、稲の花をかたどって、豊作を祈る行事に、養蚕が加わっていったのであろう。白山の信仰には、いろいろなものがくっついてわからなくなっているが、はじめの神様を菊理媛（くくりひめ）といい、蚕と織物の守り神だったのである。』・・・と。

さすが白洲正子は歴史的直観力が働くと思う。今ここでの文脈から言えば、白洲正子のこの見解で、「花奪祭（はなばいまつり）」は養蚕関係の祭りであるという点だ。養蚕と言

えば、古代に、秦一族が全国に広めたもので、美濃馬場・長滝白山神社の「花奪祭（はなばいまつり）」は秦一族による祭りでもあったのである。

比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った時に、白鳥地方で養蚕を中心に勢力を張っていた秦一族が比叡山天台宗への助力を惜しまなかったのはいうまでもない。その時に美濃馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたものと思われる。美濃馬場・長滝寺にこ数多くの歴史的文化財があるのはそのためであろう。

猿楽を現在の能に完成させた世阿弥は秦一族だと言われているが、金春禅竹（こんばるぜんちく）は猿楽の創始について明宿集のなかで、「日本における猿楽の創始者は聖徳太子に仕えた秦河勝だったとし、河勝の末子が猿楽のを引き継ぎ、それが今日の金春流に連なっている」と書いている。猿楽における本家・本流は、秦一族の金春流にあるわけだ。さらに言えば、大和猿楽の後援集団の長谷川党もまた秦一族である。秦一族が美濃馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたのは間違いないだろう。

秦一族が白鳥地方にいつやってきたかは判らないが、比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った頃には、すでに、白鳥地方に住みついて養蚕を行っていたらしい。

現在、美濃馬場・長滝白山神社では、毎年1月6日に「花奪祭（はなばいまつり）」という神事が行われている。1月6日に行われるところから、「六日祭」ともいう。

「花奪祭（はなばいまつり）」について、白洲正子は、次のように言っている。すなわち、

『 この拝殿に高くつくった花笠を奪い合う行事で、荒っぽいの山伏の伝統であろうが、その花を持って帰ると、蚕が良く育つという信仰があり、祭の時は日本全国から織物関係の人たちが集まってくるという。「花奪祭（はなばいまつり）」は古代の花祭り、稲の花をかたどって、豊作を祈る行事に、養蚕が加わっていったのであろう。白山の信仰には、いろいろなものがくっついてわからなくなっているが、はじめの神様を菊理媛（くくりひめ）といい、蚕と織物の守り神だったのである。』・・・と。

さすが白洲正子は歴史的直観力が働くと思う。今ここでの文脈から言えば、白洲正子のこの見解で、「花奪祭（はなばいまつり）」は養蚕関係の祭りであるという点だ。養蚕と言えば、古代に、秦一族が全国に広めたもので、美濃馬場・長滝白山神社の「花奪祭（はなばいまつり）」は秦一族による祭りでもあったのである。

比叡山天台宗が美濃への勢力拡大をは図った時に、白鳥地方で養蚕を中心に勢力を張っていた秦一族が比叡山天台宗への助力を惜しまなかったのはいうまでもない。その時に美濃

馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたものと思われる。美濃馬場・長滝寺にこ数多くの歴史的文化財があるのはそのためであろう。

猿楽を現在の能に完成させた世阿弥は秦一族だと言われているが、金春禅竹（こんばるぜんちく）は猿楽の創始について明宿集のなかで、「日本における猿楽の創始者は聖徳太子に仕えた秦河勝だったとし、河勝の末子が猿楽のを引き継ぎ、それが今日の金春流に連なっている」と書いている。猿楽における本家・本流は、秦一族の金春流にあるわけだ。さらに言えば、大和猿楽の後援集団の長谷川党もまた秦一族である。秦一族が美濃馬場・長滝寺に「猿楽」をもたらしたのは間違いないだろう。

浄蔵と秦一族、そして円仁とは深く繋がっている。浄蔵は知る人ぞ知る、比叡山延暦寺の名僧というか傑物であるし、慈覚大師・円仁は言わずと知れた比叡山延暦寺発展の最大の功労者である。したがって、平安初期の比叡山延暦寺を代表する名僧と言え、浄蔵と円仁と言ってもいいかと思うが、実は、秦一族も比叡山延暦寺と深い繋がりを持っていたのであり、浄蔵と秦一族、そして円仁とは深く繋がっているのである。ここではそのことをご説明したい。

浄蔵という人物については、次のホームページに詳しく書いたもので、是非、それをご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyouzou.pdf>

浄蔵と秦一族との深い繋がりについては、「中国伝来文化・三尸の思想」という私のホームページに少し書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sansisiou.pdf>

そのホームページの中から、浄蔵と秦一族との深い繋がりについて書いた部分を次に紹介するとしよう。

秦氏は、わが国の歴史上まことに重要な氏族で、蘇我氏が横暴を極めていた頃、政治家として天皇の側近から身を引いてから、その一族は芸能面や技術面で大活躍をする。

平安京は秦氏とともに整備されていったと言って決して過言ではないが、その秦氏の菩提寺が現在の八坂庚申堂である。浄蔵は秦氏に頼まれてその八坂庚申堂の住職になっていたのである。

平安時代の初め、この八坂の塔が西へ傾くということがあった。人々は凶事として恐れた。時の天皇は浄蔵を呼びつけ元通りにするのを命じた。

当時、浄蔵は八坂の塔のとなりの庚申堂に住んでいた。

この時代の僧侶は結婚は許されていなかったが、天皇がその法力が絶えるのをおそれ、浄蔵に対して結婚させて二男をもうけたということだ。64歳になっていた浄蔵は自分の法力をしばらく使っていなかったために、二人の子供を膝に乗せ、手始めとして鴨川の水を祈祷によって逆流させたとある。そして自分の法力が衰えていないことを知ると、八坂の塔に向かって祈りはじめた。天空にわかにくもり、一陣の風が吹いたかと思うと塔はゆらゆらと揺れ、元の形におさまったという。なんと不思議な話であるが、事實は、秦氏の技術陣が修築にあたる際に、その完成を祈って浄蔵が天台密教独特の儀式を行ったということではなかろうか。浄蔵の祈りと秦氏の建設技術がそれを可能にしたということであろう。まあいうなれば二人の合作である。

以上のように、現在の「八坂の庚申堂」は、江戸時代に日本三代庚申堂の一つと言われてきたが、これはもともと秦氏の菩提寺であったものである。平安時代に浄蔵がその住職になってから朝廷の支援も得ながら庚申堂としての形を整えてきたものであろう。現在は、八坂にあるということもあって、祇園花街の人たちの信仰も厚く、また「八坂の塔」のすぐ脇にあることから八坂の観光名所にもなっている。

私の論文「邪馬台国と古代史の最新」第6章「応神天皇と秦氏」に秦氏が政治家として大活躍したことを詳しく説明した私のホームページにに次のものがある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai06.pdf>

その骨子は次の通りである。

井上光貞は確実に実在が確かめられる最初の天皇としているが、私は、井上光貞説に賛成だ。宇佐神宮や秦氏との関係などから、史実だと思われるものが多いからだ。また、私は、上述のように、物部氏のもともとの出身地を大野川の上流と考えており、物部氏は瀬戸内海を通じて邪馬台国の時代から豊後地方とは深く結びついていたと考えている。応神天皇の出身地を私は筑後川流域と見ているので、秦氏と物部氏が応神天皇を擁立したとしても何の不思議もない。私の考えでは、秦氏が既に邪馬台国の時代から大和に根を張っていた物部氏に働きかけて、応神天皇を擁立したのである。

秦氏は、新羅系の渡来人であるが、新羅系に限らず、さらには渡来系や在来の人たちに限らず、また鉱山や鍛冶に限らず、土木や養蚕や機織りの技術集団を束ねて全国の殖産に力を発揮した一族である。また、猿楽における本家・本流は、秦氏の血統・金春流である。猿楽にあつて金春禅竹（こんぼるぜんちく）は、猿楽の創始について『明宿集』のなかで、日本における猿楽の創始者は聖徳太子に仕えた秦河勝だったとし、河勝の末子が猿楽のを引き継ぎ、それが今日の金春流に連なっている、と書いている。

秦河勝の子孫は政治を離れて、地方の殖産や猿楽などで大活躍をするのだが、秦河勝は何故政治舞台から姿を消すのか、その点については、「邪馬台国と古代史の最新」第8章「歴史的直観力」に書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai08.pdf>

その中から、関係部分のみ抜き書きしておこう。

秦河勝のことについては、かつて私は、中沢新一に「精霊の王」にもとづいて「胞衣（えな）信仰」というタイトルで少し触れたことがある。秦氏に関連する部分を再掲しておく、中沢新一は、次のように言っている。すなわち、

『猿楽の徒の先祖である秦河勝は、壺の中に閉じ籠もったまま川上から流れ下ってきた異常児として、この世に出現した。この異常児はのちに猿楽を創出し、のこりなくその芸を一族の者に伝えたあとは、中が空洞になった「うつぼ船」に封印されて海中を漂ったはてに、播州は坂越（サコシ）の浜に漂着したのだった。その地で、はじめ秦河勝の霊体は「胞衣荒神」となって猛威をふるった。金春禅竹はそれこそが、秦河勝が宿神であり、荒神であり、胞衣であることの、まぎれもない証拠であると書いたのである。

ここで坂越と書かれている地名は、当地では「シャクシ」と発音されていた。もちろんこれはシャグジにちがいない。この地名が中部や関東の各地に、地名や神社の名前として残っているミシャグチの神と同じところから出ていることは、すでに柳田国男が『石神問答』の冒頭に指摘しているとおりで、「シャグジ」の音で表現されるなにかの霊威をもったものへの「野生の思考」が、かつてこの列島のきわめて広範囲にわたって、熱心におこなわれていたことの痕跡をしめしている。』・・・と。

何故、秦河勝は播州・坂越（サコシ）の浜に流れていったのか？ 何故か？ その疑問について、私は、ずっと気になっていたのだが、谷川健一は「四天王寺の鷹」の中でそのことの明確な説明をしている。まさに目から鱗が落ちる想いである。では、「四天王寺の鷹」の最大のハイライトと思われるその部分を以下に紹介しておきたい。彼は、次のように述べている。すなわち、

『 秦河勝と聖徳太子との密接な関係は、太子没後、彼のおかれた社会的、政治的立場を危なくさせることにもなった。蘇我蝦夷（そがのえみし）・入鹿（いるか）は聖徳太子の嫡子である山背大兄王（やましろのおおえのおう）と秦河勝の關係に警戒の目を向けていた。（中略）この頃、蘇我蝦夷・入鹿父子の横暴は目に余るものがあった。硬玉2年（643）には、蝦夷はひそかに紫冠を子の入鹿に授け、大臣に擬する不遜な振る舞いもみられた。その年、山背大兄王が入鹿によって殺されるのを河勝は目の当たりにしている。

（中略）そこで入鹿の迫害が及んでくることをひしと感じた河勝は身の危険を避けるために太秦をはなれ、ひそかに孤舟に身をゆだねて西播磨にのがれ、秦氏がつちかった土地に隠棲したと推測される伝承が伝えられている。世阿弥の「風姿花伝」に並びに世阿弥の娘婿の禅竹の「明宿集」にその記述が見られる。』・・・と。

世阿弥は秦一族である。私は、先ほど「秦氏は、新羅系の渡来人であるが、新羅系に限らず、さらには渡来系や在来の人たちに限らず、また鋤山や鍛冶に限らず、土木や養蚕や機織りの技術集団を束ねて全国の殖産に力を発揮した一族である。」と述べたが、秦氏の子孫に世阿弥が出ている。明宿集」に秦河勝の子孫に三流あり、一は武人、二は猿楽、三は天王寺の楽人とあるように、秦河勝を先祖と仰ぐ円満井座の猿楽者と天王寺の楽人との間には根強い結縁意識があったらしい。

秦一族は、特に東北地方の発展に大きな力を発揮していくが、このことを理解するには、物部氏のことをまず理解しておかねばならない。秦一族は、物部守屋が蘇我蝦夷と入鹿に殺されてしまったから、物部一族の統括していた技術者集団を引き継いでいくのである。

法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するための寺であり、谷川健一の「四天王寺の鷹」で明らかにされているように、法隆寺は秦氏がその建設に携わった。そして、秦氏は、物部氏を引き継いで、諏訪の製鉄技術者集団を統括していた。これらの事を考えると、法隆寺と諏訪が深く結びついていたと考えても何の不思議もない。当然だろう。

永承6年（1051年）、前九年の役に出陣する源頼義は園城寺の新羅明神に戦勝祈願をし、息子義光は「新羅三郎義光」と名乗ったほど「新羅明神」の信仰をが厚かった。秦氏本拠地香春の神は新羅神であった。秦氏は新羅経由の渡来人であったので、もともと秦氏の信仰した神は新羅神であったのである。八幡神と秦氏との関係が表面化してくるのは応神天皇に秦氏が仕え始めてからである。源氏が八幡神を信仰するのは、源氏が秦一族であるということだが、新羅三郎義光は、八幡神を信仰するとともに、秦氏の本来の神・新羅明神を信仰するのである。なお、新羅三郎義光については、次を参照して欲しい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/sinra.html>

なお、園城寺は、比叡山延暦寺の寺門派の総本山であるが、そもそも最澄が新羅系であ

り、慈覚大師・円仁も新羅との関係が深い。赤山大明神のことについては、次を参照して欲しい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/heian1.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/heian2.html>

なお、京都太秦の広隆寺は秦河勝創建の寺であるが、ここの奇祭「牛祭り」は新羅系の祭りであり、新羅との関係の深い慈覚大師円仁の始めた祭りである。

広隆寺の「牛祭り」については、次のご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/usimatur.html>

さて、東北についてであるが、中沢新一は「東北」と東北とを言葉として使い分けながら、これからの世界文明を切り開くためのきわめて重要なことを言っているのだから、東北というところをご理解いただくために、中沢新一の考えの骨子をご紹介します。詳しくは、拙著「劇場国家につぽん」（平成16年7月、新公論社、絶版）の第2章「人類遙かな旅」をご覧いただきたい。

中沢新一の説く「東北」、つまり「環太平洋の環」という概念と、そこから展開される哲学は実に面白い。面白いなどと言っただけではいけないのかもしれない。すごいのだ。東北地方の伝説や民話が世界的スケールで理解でき、環太平洋の仲間たちよ、手を携えてやっといこう……という感じになってくるからすごい。そのあたりの詳しいことは中沢の著書『熊から王へ』（2002年・講談社）の「熊の主題をめぐる変奏曲」を御覧いただきたい。

中沢新一の言う「東北」とは、日本の東北地方から北海道、サハリン島、アムール川流域から東シベリアにかけての地帯、さらにはアリューシャン列島から北米大陸の「北西海岸部」と呼ばれている地帯までに及ぶ広い領域を含んでいる。

人類は、アフリカを出発し、西に進路をとる「ヨーロッパ人」と東の「アジア人」が別れたのは、遺伝学の分析によると今から五万年前から六万年前のことである。

「ヨーロッパ人」と別れて東に向かった一団は、大きく二つのルートに分かれる。故郷アフリカの温暖な気候を求め進んだ「南回廊」と、極寒のシベリア平原を進んだ「北回廊」である。オーストラリアに到着するのが約四万年前、シベリアに到着するのが約三万年前といわれている。それらの分派が当然日本にもやってきた。つまり「海上の道」も当

然あつたのであるが、中沢新一の言う「環太平洋の環」とか「東北」というのは「北回廊」のことである。

中沢新一は、「モノとの同盟」というこれからの世界をリードするかもしれないすばらしい哲学を発表した。「光と陰の哲学」といってもよい。彼によれば、靈魂を「タマ」という。この「タマ」というものを充分理解して現代の科学文明にある種の修正を加えていかないと、この先、世界はやっていけないという。私もまったくそのとおりだと思う。

「タマ」と「スピリット」が大事だ。物質的な科学文明だけではダメで、「タマとの同盟」が必要なのだが、それをなし得る地域というのは「東北」であり、日本でいうなら東北だ。まずそのことをしっかり認識しておきたいものである。

日本の中で東北地方は、中沢新一が言うように世界のこれからの文明を切り開いていく力を持った地方である。まさに、野生の精神に満ちた「日の本（ひのもと）」と言い得る。その東北の最初の歴史書というか哲学書が「ホツマツタエ」である。そのような素晴らしい哲学書を誰がどのような目的で書いたのか、私は、それに重大な関心を持ちながら、今、比叡山延暦寺と秦一族との深い繋がり、それに基づいて東北の発展のために働いた両者の功績に想いを寄せている。そのことを最後に申し上げて筆を置くこととする。